

文教協会50年を振り返る⑧

平成6年度 30周年記念事業

文教協会事務局

平成6年に、大垣市文教協会30周年記念事業が開催されました。文教協会報No.422号は、「30周年記念特集号」として編集されました。30周年によせて、大垣市文教協会会長 土屋齊氏や大垣市教育長 山本次能氏からのコメントや「大垣市文教協会30年の歩み」が掲載されました。さらにこの年、「郷土大垣の輝く先人」が編集され、10年後の平成16年には、増補改訂版が発行されています。

この中から、山本教育長と水野前教育長の挨拶やインタビューを掲載します。

大垣市文教協会30周年記念事業

1. 記念式典・記念事業

- ・ 功労者への感謝状の贈呈
- ・ 記念講演「人間と動物の知恵くらべ」
講師 鳥羽水族館長 中村幸昭氏

2. 記念誌「郷土大垣の輝く先人」発行

- ・ 76名の先賢人物像を詳しく記述すると共に、142名の事功者の略歴を紹介

3. 特色ある学校づくり紹介書

- ・ 市内各小中学校が累積してきた特色ある学校づくりの成果を紹介

4. 子どものための大垣ガイドブック作成

文教協会設立30周年に当たって

大垣市教育長 山本 次能 氏

若い頃恵那郡の岩村町へ赴任したことがあります。この岩村町は学問尊重の気風が強く、「歴史のまち」「学問のまち」として住民の心の中に生きづいていました。そして常に出てくるのが「西の大垣、東の岩村」ということばでした。このことばを聞いた時に大垣に居をもつ私は誇らしく思ったことでした。

郷土大垣は東西文化の接点という地理的条件のもとに、豊かな文化風土を築いてきましたが、中でも歴代戸田藩公の一貫した文化施策が庶民文化を大きく育ててきました。明治に入って日本最初の博士号授与者を輩出し、「学問のまち」「博士のまち」ともいわれ、一方鉄道関係で活躍した人が多く「鉄道の大垣」ともいわれてきました。

この伝統の灯は、社会の急激な変化の中で薄れがちになってきました。これを憂い、もう一度文教都市大垣の近代的再現をめざそうと市民の願いを結集し、文教協会の発足となりました。

そして今、30周年の節目の年を迎えるにあたり、教育尊重の気風に満ちた先人の遺徳を偲び、「文教のまち大垣」を合い言葉に更に力強く前進しようではありませんか。



文教協会への願い

水野 重信

大垣独自の協会設立

○新しく協会を作るといのは、大変なことだと思いますが、どんなことから始められたのでしょうか。

戸田公以来の教育尊重の伝統を、何とか現在の郷土に生かしたいという気運が、昭和38年頃から教育委員会・校長会・有識者の間に盛りあがってきました。そして昭和39年、当時教育長であった山田光之助先生が「大垣市文教振興会(仮称)の設立」を呼びかけられたのがきっかけとなり、協会設立に向かって具体的な動きが始まりました。

規約起草委員会・代議員会・理事会を各学校の代表者並びに有識者で組織し、12回の会合を重ねました。協会の目的や組織から事業内容まで活発に意見が出されました。

○大垣市文教協会のような組織は、他に例がないと聞きましたが…。

山田光之助先生が長野県で勤務されたこともあり、「信濃教育」の評判もあって、「信濃教育会」について検討しました。しかし、この会は、学校の教職員によって組織され学校教育中心の会でした。大垣では、既に教科別研究部会も行われていましたし、社会教育も含めて市民全体で教育尊重の気風を高めることを願っていましたので、「信濃教育会」とは違う、幅の広い独自の会が誕生することになりました。

○会長を土屋齊氏とし、構成メンバーは。

幼稚園と小・中学校の教職員を主とする普通会員、会の趣旨に賛同する一般市民の特別会員、会長推薦の名誉会員ということになりました。

土屋氏と共に、私も特別会員加入のお願いに回りましたが、たくさんの方が快くご加入くださいました。これは県下でも有数の経済人であり文化人である土屋氏のお陰であると思います。

幼児教育から社会教育まで含めた幅広い会は大垣市文教協会の外に例がなく、設立後に他郡市や他県から多くの照会がありました。今日までいずれも設立には到らなかったようです。

○この会が大垣に設立できたのはなぜでしょう。

第一に、戸田公の文教施策以来、教育について関心が高いという伝統があったことです。江戸時代、既に寺子屋や塾が領内のすみずみまでいきわたっていたことをみてもそれがよく分かります。

第二に、大垣は幼児教育に早くから取り組み、全小学校に幼稚園が併設されて成果をあげていたことです。

第三に、市民全体が当時既に社会教育・生涯学習に関心が高く、興文小・東小・西小・青年の家などを会場に成人学校が開かれていたことです。

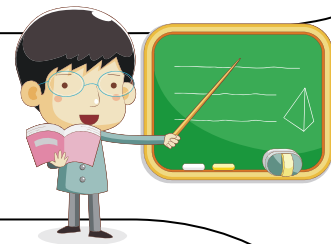
これら昔から培われてきた教育に関する伝統や基盤が、他地域では難しい、幅の広い教育の統合や市民全体の参加を可能にしたのでしょう。

○教育長になられてからは、どんな点に力を注がれましたか。

学校教育は社会とのつながりを大切にしなければならぬと考えました。そこで、幼児教育や社会教育との連携を図るために、社会教育連絡協議会を作るよう促しました。また、特別会員の方々の教育についてのご意見を直接うかがうようにしました。海外へ行く人のまだ少なかったころに、外国の教育事情なども教えていただくことができ、大変勉強になりました。

開かれた文教協会に

○今後の文教協会について、どんな願いを持っておられるでしょうか。



教育の振興に向けて、一層開かれた文教協会をめざしてほしいですね。そのためには、次のような点に努力してほしいと思います。

第一に、特別会員と学校とのつながりをもっと密にすることです。学校の先生以外の特別会員をもっていることが、文教協会の特長でもあります。会員としての会費を納めていただいているわけですから、会員としての声をできるだけ聞いてほしいと思います。教育の世界はどうしても視野が狭くなります。特別会員のような声を聞くことで、随分と参考になることがあります。またそうした方の話を聞くことで社会的なつながりも広がります。とかく「教育界には社会通念がない」と言われますが、そうして社会通念ということにも目を向けるよい機会となるはずで。

第二に、教育上の諸問題を学校だけで解決するのではなく、地域社会の中で考えていくようにすることです。学校をはじめ、文教協会や教育研究所が行っている活動について、意外と一般の方々のご存知ありません。ですから、一般の方々をもっと学校教育に招いたり、文教協会や教育研究所の活動を多くの方々に知らせたりすることが大切だと思います。そうすることが、大垣市の教育を理解してもらうことになりすし、正しく評価していただくことにもなります。

第三に、幼・小・中学校間および社会教育との関係をもっと密にすることです。登校拒否などの問題も、こうした相互の連携を密にすればかなり解決できる気がします。具体的には、相互の研究会などに参加して、授業のやり方や活動のあり方などについて学び合い、一貫した教育が行われるようにしていくことだと思います。そのための仲立ちをするのが、同じ会員である文教協会ではないでしょうか。

第四に、『大垣』という枠を広げて、県下に大垣の教育というのを知らせる活動を進めることです。力をもった先生やすばらしい実践をしておられる先生がたくさんおられますが、それが県下にはあまり知られていません。優れた実践を知らせて、その実践を学んだり、優れた実践者を引き立たせたりしていくことが必要です。創立当時の『教育研究会報』では、そうした優れた実践を具体的に載せて知らせてきました。ですから、教育研究所などがそうした役割を担って、優れた実践を紹介して、会員だけでなく、県教育委員会などにも送るようにするとよいと思います。そうすることが先生方の実践をより高めることになりすし、大垣に優れた実践者のあることを知らせ、文教協会の存在を知ってもらうことにもなります。

文教協会のような組織は、他のどの地域にもない組織です。そうした大垣独自の文教協会のすばらしさを生かして、開かれた文教協会として発展させていってほしいと願っています。そのことが、設立の精神に沿うことでもあると思います。